



更科源蔵(さらしなげんぞう)
●1904(明治37)年、弟子屈町熊牛原野(南弟子屈)に生まれ、1985(昭和60)年に81歳で逝去。東京麻布獣医学校を中退した後、尾崎喜八、高村光太郎に師事し、詩作を中心に郷土史、アイヌ文化研究など主に文学活動を続けた。
▶弟子屈町で所蔵しているさまざまな資料を紹介する。

著書の検印などに使っていた自作のエゾシカ印



エゾレンリンソウ



トモエソウ



ツリガネニカジン



キタコブシ



エジヤマザクラ



絵はがきの外箱



〔幙〕弟子屈振興公社から発行された絵はがき

絵はがきになった草花のスケッチ

1921(大正10)年、更科が獣医になるために東京の麻布獣医学校で勉強しているとき、熊牛原野では知り合うことがなかった絵画や彫刻などを得意とする仲間たちと、青春の多感なころを過ごします。1922(大正11)年、咯血(かっけつ)で体調を崩して熊牛原野に帰り、翌年復学しますが、1923(大正12)年、関東大震災の惨状を見て退学し、再び熊牛原野に帰ってきます。更科は麻布の獣医学校を中退した後も、青春を過ごした仲間たちと交流を続け、詩と版画の雑誌を出版する計画をしたり、美術を志してフランス行きを計画していたこともありました。このとき、更科の絵心が引き出され、彫刻刀を操る手ほどきを受けたのでしよう。1929(昭和4)年、熊牛原野の特別教授場が昭栄尋常小学校に昇格することになり、教員が正規の資格を取る講習に行っている留守の間、獣医学校を中退しているが更科がよからうというところで、代用教員となります。このとき書いた詩に

代用教員の詩(3)
『皆 なにをしたい』
『外へ出て遊びたいんです』
『よし、出よう』
『ワーツ いいなア』

『先生これなんです』
『空色の花咲くはるりんどう』
『先生これなんです』
『それはたんぼの芽』
(略)
『私たちは何故生きてるの先生』
『皆で仲よくする為さ』
『先生そんな事誰にならったの』
『皆あんた方にさ』
『先生ターチャンが僕をぶんなくりました』
(詩集『種薯』から)

があります。更科の授業は、必要なことを教えた後は、何とも気負いのないのどかなものでした。そんな授業の合間に更科は、原野に咲く草花を観察し、名前を調べ、スケッチします。そのスケッチブックは3冊になりました。翌年、コタンの学校で代用教員をしたときも続け、6冊になった『原野の中の更科源蔵』(森川勇作)といえます。更科源蔵文学資料館では、このスケッチブックが所蔵していませんが、1993(平成5)年9月25日(更科の命日)に催された更科源蔵を偲ぶ会第1回「原野樹(己)」のとき、札幌に在住していた森川勇作氏の取り計らいで、そのスケッチの一部が絵葉書にされ、目にするのができたのです。



図書館だより

中央2丁目4番1号
☎(よいほんいろいろ) 482-1616

☆特集展示『てしかがつ子に読まれた本2012』

平成24年度の弟子屈町児童生徒読書感想文コンクール審査結果が発表されました。
読書感想文の題材となった作品を、特集展示コーナーで紹介しています。貸し出しも行っていますので、ぜひご利用ください。

☆『毎日小学生新聞』の購読を始めた

『毎日小学生新聞』の紙面には、新聞社ならではの新鮮なニュース素材と、その背景解説がたくさん載っています。子どもへの社会への関わりを増やし「読み解く力」を養うのを伸ばすのに最適な素材ばかり。社会・政治・科学・文学など、幅広いジャンルを子ども向けに掲載しています。児童生徒をはじめ、保護者の方もぜひ一読ください。
※貸し出しはできませんので、館内での閲覧のみになります。

新刊案内

- 「スナックさいばらおんなけものみち」 西原理恵子/著
 - 「雪国89歳の郵便配達のおばあちゃん」 清水 咲栄/著
 - 「別れさせ屋の恋 パルフエタムール」 新堂 冬樹/著
 - 「終極 潜入捜査」 今野 敏/著
 - 「ちようちんそで」 江國 香織/著
 - 「望郷」 湊 かなえ/著
 - 「冬芽の人」 大沢 在昌/著
 - 「国家試験カタログ 2014-15年版」 宮下 啓二/編
 - 「あわてんぼうさちゃん」 ティモシー・ナップマン/ぶん
 - 「おみまい、おことわり？」 ポニー・ベッカー/ぶん
- たくさんのお待ちはお待ちしています！

へえー！ 韓国ではそうなんですか？

かおり&ゆかり/著



「韓国には豚年がある？」「器を持ち上げて食べるのはダメなこと？」
似ているようで全く違う！日韓の文化の違いが楽しく読める、ふたごのマンガ家によるコミックエッセイ。

おすすめの新聞

EMC通信

～川湯の森から～



玄関前でこんな子たちもお出迎え

川湯温泉街の一角にある、木の造る建物をご存じですか？秋から冬にかけては、周辺の木々の葉が落ちるので見通しがよくなるのですが、緑がふんだんな時期は目立たなくなつて困っている。川湯エコミュージアムセンター(EMC)です。

エコミュージアムの「エコ」って？

展示をしている施設で「よ」と、よく言われます。ハズれてはいませんが、でも、それだけではないんです。「エコ」とは、ギリシャ語で「家」を意味する「オikos」に由来し、エコロジーやエコノミーの語源ともなっています。EMCは、自然だけにとまらず、その地域の文化や歴史、そして人々の暮らしなどをすべてつなぎ合わせた中心に存在するミュージアム(博物館)なのです。わが町が誇るべき、火山と森と湖が織りなす大自然。その中で人と人が触れ合う場として、阿寒国立公園へと誘う玄関口として、川湯EMCは存在しています。これから1年間、どんな施設なのかを紹介していきます。もちろん、百聞(百説)は一見にしかず。「家」ですから入館は無料です。ぜひ遊びに来てください！

求ム！自然情報

白一色だった風景が、だんだんと色付き始めます。季節の移り変わりを教えてくれるのは、花や鳥や昆虫たち、そして春渡る風です。スタッフも自然観察に飛び出しますが、何せフィールドが広過ぎます。そこで、皆さんへのお願いです。「フキノトウが顔を出した」「フクジュソウが咲いた」「屈斜路湖の水が解け出した」といった状況や日にち、場所などをお知らせください。小さな情報の積み重ねが、弟子屈の財産になっていきます。



今年はいつフクジュソウに会えるかな

川湯エコミュージアムセンター(EMC) ☎483-4100
4月は8:00～17:00開館 毎週水曜日休館